



この絵図は、嘉永7年(1854)吾妻川の水運が始まった際に、各河岸へ運ばれる荷物の分担を決めた際に作られたものです(縦39cm×横55cm)。吾妻河岸は、原町・山田・岩井の3つの河岸をいいます。山田河岸が吾野峠・渋峠越え(草津道)からの荷物、原町河岸が鳥居峠越え(信州道)の荷物、岩井河岸は大道路越え(三国道)の荷物を扱う取り決めに基づいて作成されたもので、それぞれの河岸の後背地を知ることが出来ます。

吾妻川の水運は嘉永4年(1851)に原町・山田村・岩井村3ヶ村が合同で幕府に願い出て、同7年に許可されました。計画では、船20艘を建造し、下り荷物として白根・万座の硫黄・湯花・大豆・小豆・麻・炭など8600駄、上り荷物として塩・茶・干膏・壘表など4100駄を輸送し、利益555両余としていました。しかし、この計画は4年で終わってしまいました。筏川下げとの競合や、川に岩石が多いこと、要害であった空ヶ橋関所の通過時に監視要員を乗船させねばならないことなど制約が多かったことが原因と考えられます。

(参考資料)『群馬県史』通史編5 886～890頁



吾妻川通船開業記念の盃